



美麻づくりの記録

20世紀が終焉を迎える頃「平成の大合併」は、人口減少・少子高齢化等の社会経済情勢の変化や地方分権の担い手となる基礎自治体の行財政基盤確立を目的に推進されました。

平成11年4月、全国に3229（長野県120）あった市町村数は、平成22年3月には、1730（長野県77）にまで再編されました。

一方、平成の大合併以前より、人口減少社会への対応が、地域存続の最重要課題であった過疎地域では、多くの市町村が、様々な理由から市町村合併という手法を用いて、その解決を図ろうとしました。

その中では、地方制度調査会^{（注1）}（第27次）「今後の地方自治制度のあり方に関する答申」で示された『地域自治組織』等^{（注2）}を、新たな自治の仕組みとして設置する地域^{（注3）}も多くありました。

現在、そういった地域では、地域課題解決の多くが、住民の手に委ねられています。

私達の住む美麻地区（旧美麻村）もその一つです。

注1：地方制度調査会設置法に基づき、現行地方制度に全般的な検討を加えることを目的として、内閣総理大臣の諮問に応じ地方制度に関する重要事項を調査審議するため内閣府に設置する審議会。

注2：合併後、住民に身近なところで住民に身近な事務を住民の意向を踏まえつつ効果的に処理するという観点から、地域共同的な事務等処理するため、合併後の一定期間、法人格を有する地域自治組織を旧市町村単位の設置することができる等の特例を設けることが適当としたもの。

注3：合併協議に基づき設置する「①地域審議会」、法律に基づき設置する「②地域自治区」、市町村条例等で定める「③地域自治組織」又は、「④住民が任意で設置する地域自治組織」等がある。全国で（H28.4.1現在）①は25道県40市町に110団体、②は10道県15市町に148団体が設置。美麻地域づくり委員会は③、美麻地域づくり会議は④に該当する地域自治組織。

～2005（平成17年）

夜明け前



過疎がすっかり定着して40年、平成の大合併という大きな波は美麻村にもやって来ました。隣接する大田市、八坂村との合併協議が進む中で「今の状態で合併すれば地域が消滅する」との危機感を持った住民有志が、行政（村長、議員、役場）に代わって地域を担う地域自治組織の設立を村に提案しました。

設立準備委員会発足

地域自治組織設立準備委員会が発足したのは合併まで1年を切った平成17年4月のこと。村は、国土交通省の地域振興アドバイザー事業を活用し、国土交通省から地

域振興アドバイザーとして派遣される江戸川大学の鈴木輝隆教授と北海道ニセコ町の片山健也さん（現ニセコ町長）の助言を頼りに地域自治組織を設立しようと目論んでいました。

誰が地域を担うのか

6月13日、淡い期待は1回目のアドバイザー派遣で露と消えまです。「皆さんが何をしたいかわからないのに、できるアドバイザーはありません。村が無くなった後の地域は住民自治で担うしかないでしょう。」最初のアドバイザーは強烈でした。この日を境に、住民自



治の実現に向けた会議漬けの日々が始まりました。

最初のうちは、「時間の無駄」「堂々巡り」と帰ってしまう人が続出し、委員長は、2回ほど辞表を出しながらも、周囲に引き止められ、検討が進められました。

11月には、議論された内容を報告書にまとめるとともに、12月には、検討した内容を地域へ広報するため、委員自らが出演・制作した広報番組「地域づくり会議って何？」をケーブルテレビで放送しました。

住民自治で行こう！

夜毎の会議が20回を超えた平成17年12月29日、村としての業務がすべて終了した役場の会議室で、村長も出席して最後の会合が行なわれました。時計の針が午後9時をまわる頃「これからは、住民自治で行こう！」と締めくくられた会議は、新市での自治組織発足を確認すると共に、住民は地域経営という大きな役割を村から引き継ぐことになりました。

平成18年1月1日
美麻村は、大田市美麻地区と
なりました。



ズクだそうぜ!

活動目標

- 一 美麻の将来に何が必要か考えよう。
- 二 地域で困っていることはお互いに理解し解決しよう。
- 三 行政が伝えきれない地域の情報を発信しよう。
- 四 地区全体で行なう行事等の実施に協力しよう。

大町市となって4ヶ月が経った平成18年5月12日、自治会、公民館、ボランティア団体、企業、老人クラブ、保育園保護者会から氏子総代などまで、45の団体と個人が参加する住民自治の実働部隊「美麻地域づくり会議」が行政との協働を掲げて発足しました。地域づくり会議の掲げる4つの目標を達成するにはどうすべきか? 役場が用意した雛形はないので、検討委員会の議論をタタキ台として事業を考えました。



平成18年7月広報第1号発行

広報誌を発行しよう

市の広報に載らない地域の話題や、詳しく知らせたい内容を記事にしよう。字は大きくないと年寄りが見えない。発行回数はいくらにしよう? 発行回数はいくらにしよう? ゼロから話し合い広報誌を発行することになりました。第1号では、タイトルの募集から始まり、公募の結果『みあさづくり通信』に決定しました。

やまびこまつりに参加

自治会単位の参加では、人数が少なく元気も出ない。ならば地区全体で参加しよう。今では毎年百人を超える参加者で楽しむイベントとなりました。



第28回大町やまびこまつりに初めて参加 (平成18年8月5日)

先進地に学ぶ地域づくり

手探りで始まった活動は、先進地に学ぶことからはじめました。最初にお願したのは長野市松代町の皆さん。講演会と現地調査でまちづくりのイロハを学ぶ企画。「自分たちで情報発信する環境が必要だよ」と印刷機の必要性を教

ホームページで情報発信

えていただき早速導入。1回3万円だった発行費用は10分の1に節約され、必要な時に発行できるようになりました。

村のホームページを復活させ情報発信しよう。美麻以外の人もインターネットで交流しよう。お金をかけず自分たちで管理運営しよう等の意見を総合して、誰でも自由に書き込みやページ作成ができるウィキ・ペディアと同じ方式を採用したコミュニティ・サイト『美麻Wiki』が誕生しました。



みんなで作ろう! 美麻のホームページ
 美麻地区では美麻の地域づくり情報の発信・集約に向けホームページを立ち上げるプロジェクトを立ち上げました。従来のような固定情報に加え、誰もが更新できるようなホームページを創ることも検討しています。このプロジェクトに参加してみませんか?
 オフプロジェクトのページ
<http://www.hokuto.jp/mima/pwikiki/>
 試行運用していますので、ぜひご覧ください。



地域課題を 楽しく解決

美麻い〜とこ よっとくれフェア

2年目の活動は、「幅広い年代から地域づくり活動に参加してもらおう」「活動を通じて地域課題を解決する」を目的に、長野県の助成事業を活用して事業を展開しました。道の駅の活性化をテーマとして『美麻い〜とこよっとくれフェア』を実施しました。会員団体が実施する事業で道の駅で実施可能なものと連携し、立ち寄る観光客と地域の人が一緒に楽しむイベントを春夏秋冬の3回開催しました。



春の 美麻い〜とこよっとくれフェア を開催しました



第1回「美麻い〜とこよっとくれフェア」は、プランター設置とパンフレット配布から始まりました。(H19.5.3)



美麻村村制百周年に作られた絵地図復刻した観光マップを作成。



第1回ヒマワリ・コンテスト表彰式



ヒマワリの種重量当てクイズ



ヒマワリの種を使った料理教室

過疎や高齢化で増加する遊休荒廃地の解消、特産品の研究開発、地域の景観形成を一緒に行なう『ヒマワリ5000本プロジェクト』を秋の開催をメインイベントとして、地区公民館の文化祭と連携して実施しました。公民館を通じて種を各戸に10粒配布し、身近な場所でヒマワリ花を咲かせてもらい、高さ、大きさ、種の量等のコンテストを開催、賞品も搾油したヒマワリ油です。

ヒマワリ5000本 プロジェクト

地域発元気づくり支援金の優良事業表彰を受賞

美麻い〜とこよっとくれフェアは、平成19年度長野県地域発元気づくり支援金734事業の中から、優良事業(県下54事業、大北地域4事業)に選定され、平成20年10月25日に北安曇地方事務所で、表彰式と成果発表が行われました。





3年目の活動は、会員参加の地域資源発掘ワークショップから始まりました。地域の魅力を住む人の自信につなげるにはどうするか？「地域の宝は何ですか？」の質問に出てくる答えは千差万別です。

2008 (平成20年)

宝の麻の美 伝・見・発

北アルプスの眺望、自然、麻、人、山菜、棚田、空き家、情報等々。キーワードを結びつけた参加型ワークショップを事業化しました。



お宝発見ワークショップには大勢が参加



勝負草刈り本日は1時から6時までは1回で終わりました。



お宝デザインコンテスト
20年以上、人の手が入らない美麻随一の景勝地である藤の棚田を整備して、自分の宝物をデザインしたTシャツで飾る『お宝デザインコンテスト』は、延べ100人を超える会員の参加で整備された会場に、全国から100枚を超えるTシャツがはためきました。

昭和初期から20年代まで、薪を燃料とした木炭バスが運行していました。その燃料となる薪が美麻の山から供給されていたことから、大町市に現存する公道走行可能な木炭バス「もくちゃん」を燃料から作って走らせ、森林資源の活用を考えるワークショップを開催しました。当時、薪を作っていた方を講師に迎え、当時の方法で薪を作り、美麻地区文化祭で走らせました。

燃料から作る！ 薪バス運行プロジェクト



日本に現存する数少ない公道を走れる「薪バスモクちゃん」を大町エネルギー博物館からお借りして地区文化祭で試乗会を開催。



2008 (平成20年)

美麻の宝 発見・伝



美麻トレジャー・ハイク

地域に眠る宝を探し出す『美麻トレジャー・ハイク』では、市民農園利用者の方々からも協力いただいた結果、美麻地区が貴重な山野層の生息域であるという、住民が知らない宝が発見されました。

麻文化を伝承するには

昭和30年代まで地域の主要産業であり、地名の由来ともなっている「麻」は、II(イコール)大麻ということもあり、栽培が途絶えて数十年、高齢者を中心に地域の象徴と考へながらも誇らしいイメージはありませんでした。今では、子どもたちも地名の由来や、麻の歴史をほとんど知りません。

麻の歴史や価値を地域の宝として再認識しようとする中、横浜市の畳職人の植田さんから「美麻の麻が講道館の柔道畳に産地指定で使われていた。」という誰も知らない歴史を伝える情報が、文献と共に寄せられました。



「柔道の父」嘉納治五郎が考案した

講道館の柔道畳に 産地指定で使用されていた

伝統柔道畳を復元しよう

このことが契機となり、柔道畳のルーツを探る本当の宝探しが始まりました。

噂を聞いて、かつて麻を栽培していた農家の方々からは、正麻や麻系製造機などが次々と提供され、ついには、講道館に糸を納めていた問屋さん(新行・小林さん)からも証言を得るなど、材料・機械・技術と麻糸を作る条件が整ったからには、伝統柔道畳を復元するしかありません。地域の象徴である麻を通じて、お年寄りには地域の誇りを、子どもたちには歴史と伝統を知ってもらおうと、麻農家だった地域の方を講師に



明治時代に使われていた材料から製造工程にまでこだわった柔道畳の復元作業では、美麻から「麻」、菜種油、糸をつむぐ「人の技」が提供されました。



復元作業がきっかけとなり、柔道畳はNHKテレビ番組「歴史秘話ヒストリア」で加納治五郎を取り上げた番組で紹介されました。(H21.9.30)
<https://www.nhk.or.jp/historia/backnumber/18.html>

迎え、学校で柔道畳の復元作業を行いました。半世紀の時を経た麻を小学生が紡ぎ、その糸で中学生が柔道畳を縫います。歴史に刻まれた地域の宝を次世代に引き継ぐ貴重な時間を共有できました。

